

実践報告

発症から長期経過した後天性小児失語症に対する  
活動・参加を主とした作業療法の有用性  
—自動車運転免許の新規取得と新規就労に至った事例から—

北上 守俊<sup>1,3)</sup> 白井 祐輝<sup>2)</sup> 高野 友美<sup>3)</sup> 秋山 明美<sup>3)</sup> 荻荘 則幸<sup>4)</sup>

\*1 新潟医療福祉大学

\*2 障がい者支援センター わかば

\*3 新潟県障害者リハビリテーションセンター

\*4 ゆきよしクリニック

(2019年11月30日受付, 2020年1月10日受理)

要旨

後天性小児失語症の成人以降の社会参加に関する報告は少ない。今回、小学生で脳梗塞を発症し、右片麻痺と後天性小児失語症や注意障害などの高次脳機能障害を併存した10歳代後半の男性が、自動車運転免許の新規取得と新規就労に至った。本事例に対し、洗濯や公共交通機関の利用などの活動・参加を主とした作業療法を実施した。その結果、発症8年経過後においても言語機能や注意機能、情報処理速度などの認知機能が向上し、当事業所利用開始6ヶ月で自動車運転免許取得に至った。就労面では、社会的スキルや職業スキルの向上を目的に、ワークサンプルの実施や就労支援機関などと連携を図り、職場実習や就職面接を繰り返した末、当事業所利用開始21ヶ月で新規就労に至った。発症から長期経過した後天性小児失語症を含む高次脳機能障害のある人への活動・参加を主とした作業療法は、認知機能やIADLを向上させ、自己効力感やQOLにも寄与する可能性が示された。

キーワード 後天性小児失語症, 自動車運転, 就労